

## ダニエルズ歴史班B

### 会館に関する碑文紹介

増田厚之(東海大学大学院文学研究科東洋史学専攻修士課程前期)

キーワード：会館・交易・江西商人

調査期間・場所：2003年11月24日～12月23日 思茅、普洱、巍山

**Title: Report about "Huiguan" (Merchant Guild) stone inscriptions**

**MASUDA Atsushi(Master Student in the History Course at Tokai University)**

Keyword: merchant guilds, trade, Jiangxi merchant

Investigation period and district: November 24 ~ December 23 in 2003, Simao, Pu'er, Weishan

要旨：中国漢民族商人の活動に関する記述のある「重脩萬壽宮碑記」を紹介すると同時に、自分の研究テーマに絡めて、漢民族流入による商業の始まりが南方の開発にとってどういう意味を持っているのかを調べる。

#### 1. はじめに

今回の調査では、前回に引き続き多くの拓本を採取することができた。その中に、明末清初の商業実態を明らかにしうる、会館に関する碑文を発見することができた。明末清初の混乱の中で一時的に衰退していた商業活動が、清代の初めに復活する過程で、雲南におけるその実態を浮き彫りにする一つの資料である。この報告書では、その会館について書かれた石碑「重脩萬壽宮碑記」を紹介し、いかなる意味を持ちうるのかを述べる。

#### 2. 清初南方商業の姿

##### 1] 会館

清朝の樹立によって国内が安定し、商人が活動を再開するようになったことは先に述べた。これら商人が他の地域へ赴き、活動を行なうのだが、その人数が増えだすと作られるのが会館である。会館は語義的にいえば、仲間的な団体のことを指して言われるが、団体の事務所としての会館が現れるのは宋代である。これが明代に入ると、単なる事務所というだけではなく、活動の本拠地となり、それにふさわしい施設まで備えるようになる。会館と言う名称も、明代に入ってから名づけられた。会館の規模は様々で、小部屋の間借り程度のものから、1000坪以上の土地に旅館施設・事務室・応接室・会議室・倉庫を持つような整備されたものまで存在している。雲南では、それまでに漢民族の移入がなかったため、会館が存在するということは漢民族商人が多く滞在するということの証明になる。

中国人は、同郷者同士のつながりが極めて強いため、府・州・県の単位で同郷会館を作ることが多く、さらに商業・工業などの同業者に分かれていた。当然、同郷関係によっては、商人の会館が一つの地域に複数存在することもある。同業以外にも、同窓会や町内会、アヘン禁止運動の団体も存在していた。

##### 2] 三藩の乱

商人が雲南に入り商業活動を開始する中で、重要な事件が発生する。清朝の中国征服に対する最後の反動であり、清朝がその興亡をかけて取り組んだ三藩の乱である。当時雲南を統治していたのは、清朝の中国征服に功績のあった呉三桂であったが、その功績を認められて平西王に封じられ、軍事財政権を与えられて、清朝から半ば独立した形での統治を許されていた。同じく、このような立場にあった人物に広東に平南王として封じられた尚

可喜、福建に靖南王として封じられた耿仲明がいたが、次第に自らの功勞をたのんで専横になっていった。三者の中で最も勢力の強かった呉三桂は、領内の人事・軍事・財政にかんしても清王朝の干渉を受け付けず、独自に貿易を行い、関税・塩税を任意に徴収し、鉱山を開発して独自の銅銭を鑄造するようになった。この目に余る独断行為に、清朝政府は三藩を警戒するようになった。

1673年、尚可喜が清朝に引退を願い出ると、清朝は三藩撤廢のために、全軍の撤兵を命じた。これに対して呉三桂は、天下都招討兵馬大元帥と自称して清朝討伐の軍を挙げた。9年間にわたる長い戦いは、清朝の勝利に終わり、この乱を乗り切ったことによって国内は安定し、康熙・乾隆の全盛時代を迎えることになる。

この呉三桂が独自に行った貿易が、チベットとの茶馬貿易である。貿易を行うということは、当然それを遂行する商人の存在を窺うことができる。呉三桂自身が漢民族であること、清朝に入り商人の活動が活発になっていることを考えれば、漢民族、主として商人が雲南に流入しており、貿易に従事した商人も漢民族であった可能性が発生する。

### 3. 重脩萬壽宮碑記(乾隆15年)

この石碑は、思茅市文化館にあったものである。我々が文化館を訪れたときには横倒しの状態で置かれており、雨風にもさらされ続けていたようである。高さ2160mm×幅990mmと大きいものであるが、石碑自体は砂岩質の磨耗し易い石でできている上に砥石として使っていたらしく、磨耗が激しく文字がかなり薄くなってしまっていた。周知の事実とはいえ、石碑の保存・管理の現状を見、碑文調査を急がなければならないという思いを強くした。もう一つ、裏面にも文字が彫っており、「萬壽宮碑記」(年代不詳)が存在していたが、こちらはさらに状態が悪く、判読できる文字はあってもひとまとまりの意味ある文章としては見るができなかった。特に下部の磨耗が激しく、ほとんど文字が見えない状態であった。

### 4. 「重脩萬壽宮碑記」研究上の意味

この碑は、会館について書かれたものであるが、本来雲南にはないため、北から流入してきた漢民族の手によって作られたものである。石碑には「自乾隆二年(1737)」との記述があるが、これは、お茶の栽培が発展し、商品化が激しくなり始める直前の時期である。この時期に雲南に流入する漢民族で、同郷出身者の会館を作り、維持するだけの力・資金などを持つものといえば商人、特に中国西南部の交易を手がけている江西商人に他ならない。清代の商人集団とは、①山陝商人や徽州商人といった、国家権力に結びつき、全国的な活動を行っていた特権的巨額商人集団、②湖北商人や四川商人のような、地域経済圏の自立化に伴って成長し、移入代替商品生産を交易の中心におく新興広域商人集団、③江西商人に見られる、末端の流通を担う小商人集団の三つに分けられるとされる。[山本:P146]江西商人の起源は、明代末期からの慢性的食料不足に端を発して各地で商業活動を行うようになった人々であるが、各種地方志によれば、雲南における漢民族流入は江西地方の貿易客民がほとんどであり、彼らの居留によって人口が増加し、開墾が進んだという記述がある。さらに、会館や同郷祠廟の多くは江西の移民・客商が建てたものであり、ここからも江西商人が雲南で最も多い商人集団であることが窺える。[山本:P144]つまり既にこの時期、江西商人は思茅にまで進出を果たしており、新たな市場として目を付け、市場の開発を始めているとの証明になる。茶に関して言えば、道光年間に書かれた『普洱府志』では、「土人」の活動として茶の栽培について取り上げており、六大茶山として倚邦・易武・莽芝・漫撒・攸楽・平川という名があがっている(巻八物産 六頁)。既に茶を重要産物として注目しているのである。この漢民族による交易・商業の開始が、南方開発、特に思茅においてどのような意味を持つのか、その変化が中国全土の商業・経済においてどのような意味を持つことになるのかを、主要産物の一つである茶を通して確かめたい。もっとも、この二つの石碑だけでは不完全であり、資料としても数が少なく不十分である。今後の調査を通して会館に関する石碑を集め、その内容から当時の交易・商業の実態について新たな切り口が窺えると思われる。

抄録：重脩萬壽宮碑記

本文の右端及び左端以外は、人物名と、寄付金額に関する箇条書きであるため、その部分は割愛した。

重  
脩  
萬壽宮  
碑  
記

思茅之□萬壽宮□自乾隆二年□也□都□天同□□□□□牆垣□□□兌□□人事之奇□天  
工之巧一片空明□□不□□□大嶽詎創造之以遂為□蛾捐□ [ 改行 ]  
□□當田□姓□□□□□工木料未□隨便作為無竹木以防風雨之故耳我輩□此廟□無不□心□□價□不盛勢凋殘但  
工費浩大非□力能□乃今天 [ 改行 ]  
重象而人□愈盛翔之□前茅亦□倘不鳩工修□將來之經費用力不追日而彳者幾□□□□同僧募化合用損貲增脩計日  
而成紀綱期立今工□ [ 改行 ]  
告竣鐫石垂亘古今不□□日小稍之哉詩云神之聽之介爾景福 [ 改行 ]  
(省略)  
(最後一行)  
乾隆拾伍年歲次庚午仲秋月 穀旦

参考文献

- 平凡社編『アジア歴史事典』平凡社 1984 年 4 月  
京大東洋史辞典編纂室編『新編東洋史辞典』東京創元社 1980 年 3 月  
松丸道男・池田温・斯波義信・神田信夫・濱下武志編『世界史体系 中国史一明～清一』山川出版社 1999 年  
6 月  
中国歴史大辞典清史卷編纂委員会編『中国歴史大辞典 清史卷 上・下』上海辞書出版社 1992 年 10 - 11  
月  
山本進『明清時代の商人と国家』研文出版 2002 年 11 月

Point: This report describes the “Chongxiu Wanshou Gong Beiji” stone inscriptions which record the activities of Han Chinese merchants. It considers the significance of these inscriptions for the history of Han Chinese style commerce in developing Yunnan.

写真 「重脩萬壽宮碑記」(思茅文化館 2001.12.1 撮影)

\* 文字の見やすさを優先して、画像を回転してある為、写真の右側が地面になっている。

1. 碑面上部



2. 碑面中部



3. 碑面下部

